

第3回品川区文化芸術・スポーツ振興ビジョン策定委員会 議事概要

日時：平成21年7月28日 14:00～16:00

場所：品川区役所議会棟第一委員会室

議事次第

- 1 開会
- 2 委員長挨拶
- 3 グループアンケートの結果について（資料に基づき事務局より説明）
- 4 懇話会に関する報告について（資料に基づき事務局より説明）
- 5 ビジョンが描くまちの姿に関する意見交換（資料に基づき事務局より説明）

委員長

- ・次回委員会では、ビジョンの骨子案の議論を行うので、今日は、区としてどんな方向性にすべきか、を議論していただきたい。「品川区をどうしたいのか」「こうなりたい」ということを示してほしい。

副委員長

- ・この委員会は皆さんに夢を語っていただく場になるが、「こういう環境づくりがいい」、「こういう力を持った区民を育てていきたい」という、2つの大きな柱があると思う。「主体的に参加する区民像」と「それを支える文化スポーツの環境」である。その辺を少し意識しながら、どんな「地域社会」や「地域社会を支える区民像」をイメージするのか。そのあたりも考えていただきたい。特にスポーツでは、「スポーツを通して子どもたちを育てる」などの視点を踏まえて議論していただきたい。

委員

- ・これまでの会議に参加して、文化芸術・スポーツ振興を考えるときに私が思ったことをまとめた。1番目の「活動に関わる全ての人の理想は真っ当であること」については、活動している人が自分たちの活動に疑問を抱かないような「正当性」が必要だということ。例えば、サッカーや野球で子どもたちが競技をしていると、応援している保護者、大人がややもすると勝負に熱くなり、やじを飛ばしたりすることがある。礼節がないと、物事はすさんでしまう。すさんだ社会では長生きできない。健康を考えるときに、「礼節を守ることができる」というのが区民全体に対しても必要だと考えた。
- ・2番目（敷居の低い行事などを開催し、意識の変化を促す）について。小学校 PTA 連合

会で、「親と子の文化芸術鑑賞会」をきゅりあんの大ホールでやっている。その中の目玉企画として、一昨年までは抽選で40名に、きゅりあんの舞台裏を見てもらうことをやった。昨年は品川区民管弦楽団に協力いただき、楽器体験を子どもたちにしてもらった。管弦楽団の団員が自分の楽器を持ってきて、子どもたちに楽器を触らせたりした。バイオリンを持ちたい、フルートを吹きたいと思っても、こうした楽器は敷居が高い。少し試してダメだから捨てる、というわけにいかない。ちょっとこれおもしろそうだな、と機会があれば体験できるような、そういう間口の広さがあること。全然知らない人に話しかけるのは、みんな怖いと思うが、少し勇気を持って話しかける。少し参加する、勇気を持って参加する、こういう日常の中での積み重ねで、人に話し、声をかける勇気が培われるかと思い、こんな催しを試してみた。

- ・ 3番目（区全体として調和のとれた活動が効率よく盛んに行われること）について。いろいろなところでいろいろな活動が行われている。ところが、今はあまりにも活動が多く、同じ人間を取り合うことがある。イベントやスポーツの割り振りができるような。横断的な特命チームと資料には書いたが、行政は「縦割り社会」で、あまり連携がないのではないか。縦割り行政の中で、横に並べて、いろいろな調整などいままでわからなかったことに手を差し伸べていただけるといいのかなと考えた。
- ・ 4番目（文化芸術・スポーツ振興ビジョンを通して、文化的にも、肉体的・精神的にも知性ある人間として本当に豊かな人生を送れる多様性と方向性を示し、それによる施策が人々の考え方の良い変化を促進し、良い連鎖反応が区内のみならず全国に広まる）について。これは理想論と言われてしまうかもしれない。自分もそうだが、毎日の暮らしに汲々としている。その中から時間を割いて、一昨日は六行会のチルドレンズフェスティバルを見てきた。私はずっとスカッシュをやっているが、なかなか時間がなくて今は行けない状況。それでも、なぜチルドレンズフェスティバルに行けたかということ、行きたかったから。結局、自分の時間の中の優先順位をどこにするか。お金を稼ぐことに優先順位を高くしてしまいがちだが、今回のビジョンを通して、お金を稼ぐよりも文化芸術をやりたいとか、こっちのほうが私の人生の中で優先、という人が少しでも増えるような品川区になるといい。区としては財政的にそういうことをやっているとなれるかもしれないが、それでもこんなドンキホーテみたいな区があっても、全国的にそういう影響を及ぼすことができるのかなと思う。

委員

- ・ スポレク推進委員会について説明させていただきたい。昭和59年から小中学校全校あわせて体育館を使用することになった。その中でいろいろな工夫してスポレク人口が増えている。スポレクを中心にした団体を立ち上げようと、大崎地区に拠点を置いて2年半になる。スポレク推進委員会といういい組織をバージョンアップしようとしている。
- ・ 一番問題なのは「地域にどのように関わってもらえるか」。地域、商店街、行政とともに、子どもたちをどうやって育てようかといろいろなプロジェクトを作っているが、なかなか

か一丸とならない面がある。品川区の中に 17 地区スポレクがあるが、それを 4 つぐらいに分けて、自分たちの手でスポーツを楽しもうではないか、地域で楽しんでいこうか、と（活動を）進めている。

- ・「日常に笑顔のあるまちづくり」が大事ではないか。スポーツをしていると、お互いに顔を見合せながら話ができる、あいさつができる。こういうことがこれからのスポーツを進めるためにもいいのではないか。品川スポーツクラブを成功させるために今頑張っている。

委員

- ・スポーツも文化もかわりなく、発信したい人がいる。情報を発信したいとか、こういう活動をしていることを伝えたいと思う人がいて、それをまた受信したいと思っている人がいる。知りたいと思ったり、どんな活動をしているのかなと思ったりする人がいて、それがスムーズにできるのが一番いいと思う。送信、受信がスムーズにできることによって、人々のつながりができる。青少年や高齢者にかかわらず、皆さん知りたいと思ったり、知らせたいと思ったりすることを、お互いに送信、受信がしやすく、人々のつながりができれば、まちのにぎわいになったり、品川区としても人々のつながりが力になるのではないか。

委員

- ・たしかに区民の生活がなんとなく忙しくて、毎日が生活で汲々としている。そういった中で、アンケートを見ても、本当だったらスポーツや文化や芸術には関心はあるが、実際の活動の姿を見ると、どんどん減ると感じる。ライフスタイルや生活の実態などから入っていかないと、ビジョンを掲げたが実生活とつながっていないのでは、本当に力のあるビジョンにはならないのではないか。
- ・どうすれば文化や芸術、スポーツに参加できる、しやすい環境を作れるのかと考えると、例えば、親の介護でゆとりがなかったり、仕事が長時間労働であったり、派遣等の不安定な労働だったりすると、時間もお金もない。生活そのものが不安定な状態では、文化やスポーツからますます遠のいてしまう。そこをしっかりと改善させる方向でないと、広がりが出来ないとと思う。
- ・いろいろな資料を見ていて大切だなと思ったのは障がい者のこと。障がい者が生き生きと文化やスポーツ、芸術に参加できるまちをつくるには、当事者の意見を聞かなければわからないので、障がい者団体の意見も聞きたい。パラリンピックを見ても、昔はリハビリの延長線だったようだが、今はスポーツとして確立して、見ている人も勇気や元気をもらえる。そこまで本格的ではなくても、いろいろなかたちで障がい者の方が文化芸術やスポーツに参加するには何が必要なのか、当事者の意見を聞く機会を持てたらと思う。

委員

- ・ケーブルテレビについて非常に期待感が強いので、責任の重さを感じる。

- ・品川区をどんなまちにするかを考える時、置かれている環境を認識しないといけない。東京 23 区の特別区のひとつ。自然に親しみたいとか、田舎へ行きたいというところではなくて、都市型の、首都の中で、住みたい環境、住みたいまち、このまちへ行きたい、ということはどう考えるのかはひとつの視点。自分たちがどういう環境にいるんだという認識が必要かと思う。
- ・一番基盤になるのは「人」だと思う。都市型のこういう位置づけにあると、「教育」というポイントは、文化芸術・スポーツにおいてもやはり基になるものだと思う。品川区は教育熱心な区なので、年少者対象者の話は多いが、都市型モデルとして、青少年、中年にとってもそういう場であってほしいと思う。
- ・都会の中で住みたいまち、であって、人と人のつながり、にぎわいはあっても、遊びに行きたいというまちだけではない。新宿、池袋、浅草とかではなく、にぎわうという意味は、人がそこに住みたい、そこで生活をしたいということにもっていったらいいのでは。モデルとなって、準都市エリアや郊外、農村エリア、漁村エリアと交流が深められて、そこからあそこに行って話を聞きたい、あそこをモデルにしたいといわれるような地域、まちにしたい。

委員

- ・青少年にかかわる仕事をずっとしてきたが、だいたい同じ時期に、同じような行事が幾つも重なってある。青少年委員会しかり地区委員会しかり。サッカーや野球など、すべてひとつの時期に集中してある。私は品川区の子どもは、全部地域の子どもなんだという考えで、いつでも、どこでも、だれでもが参加できる行事をしていきたい。
- ・品川区の地区連合会が 13 地区ある。この間、区民祭りを終えたばかりだが、同じ月の同じ日に 3 地区、4 地区が、行事をいっぺんにやってしまう。よその地区の区民祭りはどうなっているのか興味はあるが、時間もないし、準備段階からほとんど身動きができないので、そういうチャンスに恵まれない。
- ・子どもたちのキャンプにしても、海に行きたい子ども、山に行きたい子ども、川に行きたい子どもなど、いろいろなニーズがある。そのとき、町会や地区を区切らないで、品川区の子どもたちがどこの地区のキャンプにも参加できるような環境づくりができればすばらしい。
- ・今まではひとつの学区域の子どもが、5 年生なら 5 年生同士のつきあいしかなかったが、学区域が撤廃されてからは、いろいろな学校の 5 年生が集まってキャンプを楽しむことができている。これを品川区全体に広げられたら、青少年活動としてすばらしいのではないか。町会単位、地区単位に限らず、子どもたちがどこにでも参加できるような、そんな品川区ができればいいと思う。

委員

- ・品川区の考え方として「住んでいてよかった、これからも長く住み続けたいまちにしたい」というのがある。区民には、子どもだけではなく、大人もお年寄りもいる。その中

の文化芸術・スポーツだけとるならば、あまり一遍に注ぎ込もうと考える必要はない。むしろ、人々がやっていることを外から見て、一緒に入りたいと思えるような活動をやっていけばよい。学生をターゲットにする方、(活動をするのに)余裕のない家庭をターゲットにする方もいると思うが、総花的にやる必要はない。

- ・あえて言えば、我々区民がどうやって品川区を“惚れさせられるか”ということ。そういう活動を念頭に進めるべきだと思う。

委員

- ・「いつでも、どこでも、だれでもが、いつまでもスポーツに親しめるまち」をつくっていくのが私たちスポーツ協会の仕事だと思っている。障がい者スポーツについては、スポーツ協会でも昭和50年代から水泳を中心にやっており、これからも大きな課題だと思っている。
- ・障がい者、高齢者といった方々がいつまでもスポーツに親しめる環境をつくるのは、行政やスポーツ協会だけでできるわけではない。地域の力がなければ、スポーツ活動に参加する機会もできないし、環境も整備できない。スポーツを振興させるため、スポーツを通じて活気のあるまちをつくっていくためには、それぞれが主体性と責任を持ちながら、自分たちの役割を果たしつつやっていくことをビジョンの中で考えていきたい。

委員

- ・文化芸術、スポーツが、品川区の中の人々の輪に結びつくようなまちづくり、コミュニケーションを取りやすい、たとえば品川は町会組織の活動もあるが、その活動とは別の意味で活動の母体になる。例えばスポーツ。この(アンケート)の中にも、地域で優勝したので盛り上がったというのがあった。そういうきっかけがあれば、たとえば高校野球など、これから頑張ってくれば、それによって地域の盛り上がりが出てくる。スポーツ協会では優秀な選手を育てる。文化でいえば、今度「劇団四季」が品川に入ってくる、それを見る機会があれば子どもにとってきっかけがひとつできる。そういう品川であってほしい。当然、高齢者が積極的に参加できるかたちにしてほしい。

委員長

- ・スポーツについては、「区民が区外で活動をしている」「多くの区民が気軽に参加できる、話しやすい環境をつくっていく」といった意見が多く挙がった。どこから多く人が押し寄せてにぎわうのではなく、区内で突出した活動をする(とにぎわってくる)。余裕のない生活をしている中で、どうやって(活動の場に)出てくるのかについては、何らかの仕掛けが必要になると思う。
- ・前回の調査結果や懇話会などを見て気になったのは、品川区には文化芸術・スポーツをやっている人は多いが、その割に、そのことに気づかないでいる。普段、多くの区民は盛んに参加していて、個人の活動として区内でやっている。それなりに個人としては充実した活動をしているという確証を持った。
- ・小・中学校の子どもは、公立の学校に通っている場合は地域とのかかわりもあるが、23

区内は私立への進学率が高いので、区内に住んでいながら区外に出ている人も多いと思われる。先日の懇話会では、品川区で働くことはよい、良い場所だと企業の方から意見があった。企業のサークル活動もあり、職場のサークルが地域と活動をする。それで平日だけでなく土日にも会社に来る人もいる。こういった区外との関係を持った方々との関わりについてもご意見いただきたい。

委員

- ・ 太極拳をやっている。そこにきている参加者に聞いて一番感じたことは、「どうしたらここへ来られるか、すぐに教えてもらえるところはないか」という人が多い。以前から、区役所にどうぞ（聞いてください）と言っているが、区役所にはちょっと電話をしにくい、という人が多い。そういう窓口がどこか1ヶ所あればいいと思う。
- ・ 以前、スポレク推進委員会のテニススクールで親子教室があったが、その開催日が地域のお祭りとおぶつかっていた。そういうところにも少し配慮があればと思う。

委員

- ・ 私は商工会など、中小企業の関係者と付き合いがあるが、やっているのはゴルフばかり。品川区にはゴルフ場はないので、千葉県などへ行く。いまシーズンでは「サーフィン」をやっている人が多いが、やはり海のあるところへ行ってしまふ。残念ながら、区内の施設でスポーツをやる人は、1割もいないのではないかと思う。
- ・ 御宿（千葉県）が外国人も含めて居住者が増えていると聞き、行ってみた。するとサーフィンをやりたいがために（に移り住んでいる）。サーフィンは、もう季節のスポーツではなくオールシーズンのスポーツなので、そのスポーツをやりたいマニアックな人たちを集めて、サーフィンの村、アパートなどを建てて、そこにいらっしやいという政策をしている。そういったことも含めて、スポーツという観点から考えると、ファッション性を持った施設を提供することが重要ではないか。文化芸術の部門では、品川区は充実しているので、ある程度、勝算はあるのではないかと思う。

副委員長

- ・ 文化でもスポーツでも、「消費する」という観点と、「生産する」という観点はかなり違うと思う。例えば、スポーツのトップレベルのもの、文化芸術の一流のものを見たいというのは「消費」だが、自分たちで絵を描いたり、自分たちの持つ能力を（発揮して）子どもたちとやりたいという、「生産」または「再生産」になる。こういった観点で、これからの品川区の文化芸術・スポーツをどう考えるかご意見をお聞きしたい。

委員

- ・ 文化芸術・スポーツは、ライフスタイルのひとつだと考える。さきほどのサーフィンやゴルフの例のように、スポーツ・文化芸術にファッション性が必要な要素だと思う。同時に、その魅力を増すためには、ブランド力をつけていかなければならない。スポーツの上でも、生産と消費、双方でファッション性とブランド力をいかに創出していくかがキーポイントになる。それに向かって切り口を考えていくべきではないか。

委員

- ・品川区、自分たちが置かれている環境をまず認識し、ここで何を求めるかをきちんと考えないといけない。例えば先ほどのゴルフやサーフィンの話をここでやろう、広げようという議論をするのは少し違う。品川の中で何を求めたらいいかという視点が大事なのではないか。
- ・品川エリアの中だけで、生産と消費をしようとするだけでなく、ベースになるものはここだが、生産と消費をする場はなにも品川の中に限らない。もっと広く、ほかのエリアも含めて交流ができて、「品川に行ったら、これがエンジョイできる」「こういうことができる場」としての品川、が大事なのではないか。交流の場につなげたらいいと思う。

委員

- ・品川区の環境と考えると、都会というのは人が群れをなしているだけでにぎわっている。品川では、ゴルフやサーフィンはできないが、隣の区に行けば、きゅりあんを凌ぐ大きなホールがあり、美術館も港区にはたくさんある。品川だけで完結できる話にこだわらず、にぎわい自体はもともとベースがあるのではないか。それをどうすればいいかが今回のビジョンに対する課題かと思う。それは、今ある資源なり、輪に結びつくような何か仕掛けをつくること。気軽に参加できる、あるいは敷居の低さ。最終的に判断するのは区民個々。つなぎ合わせる仕掛けや環境づくりを今回のビジョンの中では求めて行ったほうがいいと思う。
- ・きゅりあんでは事業をやるごとにアンケートを取っている。9割以上の方は「いい事業をやってください」「もう一回やってください」「どこへ行けばこういう（情報が）わかりますか」という意見。初めての方によく言われるのが「こういう機会があったのを知らなかった。もっと知りたい」という意見。
- ・区では、いろいろな事業、たとえばウオーキングなども、いろいろな場で取り合っている。それをもう少し整理して、みんながいつでもここを見れば参加できる、発信者と受信者の話もあったが、それをどうするかたちで（提供し）区民が品川区にこだわらずに、いろいろな興味を持って、都内には行きやすいところもたくさんあるので、そういった盛り上げ方をしていくのもひとつのやり方かと思う。

委員

- ・「消費」「生産」の話でいうと、「消費する」ということでは、例えば、一流のスポーツ選手や音楽家の指導を受けてみたい、（演奏を）聞いてみたいという欲求も強いと思う。一方で、そうした活動ができるのは、一定の規模や集団だと思うが、必ずしも、そこだけがスポーツではないし、音楽活動・文化の集まりではないという部分も大事だと思う。
- ・例えば、仲間と一緒に草野球を始めようと思いついても、結局、練習する場所がない、規模が小さくてメンバーが集まらなくて試合ができないなど、いろいろな条件があって難しいが、それはそれで立派な活動だと思う。そういう視点も大事ではないか。
- ・「生産する」のは、芸術的な作品を発表するとき、〇美術館で誰でも発表できますと言

われても、何となく〇美術館の雰囲気合わないとか、敷居の高さを感じる。逆に、そういう場所で自分の作品を飾ってみたいという思いもあると思う。一方で、立派な作品、自分のこやしになるような作品を置いてほしいという思いもある。

- ・いろいろな答えがあっていいのだが、一定規模に満たない、小集団の活動実績がない団体が肩身の狭い思いをしてしまうと、一括した幅の広いビジョン、活動になるほうがいいのではないか。

委員

- ・「にぎわい」といっても、一過性のにぎわい、例えば、商店街でのイベントでは、そのときは盛り上がるが、日常的には根付かない、持続しないことがある。にぎわいのあるまちづくりという面でいえば、一過性のものをいろいろ仕掛けとしてやるのは大事だが、それを持続していかなければいけない。
- ・やはり文化芸術・スポーツを通して、人がそこで新しいものに出会い、また新しい人と出会って触れ合っていく中から、本物のにぎわいが作られていかなければいけない。

委員

- ・行政の縦割りの中で、お客を取り合うというご指摘があったが、私たち（行政）も反省点もたくさんある。同じ時期に集中してしまうのを広げていくにはどうするかというと、（たとえば情報を）入力したときに、既にこの事業はどこどこで主催しています、というのがうまくわかる仕組みがあれば、同じことをいくつも重ねることはないかと思う。
- ・たとえば、時期が集中する「桜祭り」は、いろいろなところの桜を見物して回りたいと思っても、どうしてもその催しをしている地域の方は、そこから離れられない。でも発想を変えて、その地域の人が企画して、その地域ではない人に運営してもらって、自分たちは他の場所に行くなど、いろいろなやり方はあると思う。なるべく行事が集中せず、いろいろなところへ分散されて、一年を通じてどこかしらにいけば触れ合えるというのは、今後もしっかり研究していきたい。

委員

- ・持ち回りで運営するという方法もある。毎年交代で、主催者側と見に行く人（参加者）をやる。地区祭りも、今13地区が短い期間に集中している。4地区と3地区（の祭り）に行っただが、違いがあって面白い。例えば、1年置きに今年は第5地区、次の年は第2地区がやるなど、持ち回りでやっていくと、（集中の問題を）解消できるし、（開催しない地区の人も）見るだけでなく、手伝ってあげることもできる、そういうかたちで交流をしていってもいいかと思う。

山田副区長

- ・今回のキーワードとしては、「にぎわい」「つなぐ」「新たな発展」だと思うが、新たな発展を目的としておくならば、「文化・スポーツによる豊かな地域社会づくり」が大きな目的にあるのではないかと思う。その目的を実現するために、「つなぐ」「にぎわい」という手段が使われると思う。

- ・先般、新型インフルエンザ対策の際、区内の2カ月分の行事を把握したら、600近くあった。それほど日常的にイベントが行われている。これは区が把握できている行事なので、まちの実質的な活動はもっとあると思う。これを整理・統合するというのは、言うは易し、行うは難し。文化もスポーツも主体性が一番大事なので、その主体性を損なわないかたちで、協働できるところをどうにかたちで統合しながら、より効果を挙げていけるか、検討することも大事だと思う。

委員長

- ・品川区は、地域によって結構いろいろな表情がある。住宅エリア、開発中のエリア、伝統のあるエリアなど、そういう地域別のあり方、変わり方について意見を伺いたい。
- ・文化芸術では、例えば杉並区はアニメに力を入れているが、品川区も、集団としての「ブランド」や「アイデンティティ」があると思うが、その点についても伺いたい。

委員

- ・品川区は、地域ごとに非常に違っていると思う。その地域ごとの伝統は、伝統として残してもらいたい。文化伝統（の保存）という意味でも非常に大切だ。ただ、そのことにあまりこだわると、新しく移り住んできた人が入ってこられないという問題もあるので、そこをいかに結びつけるかという方法を、区がとるのか、地域がとるのかは難しい問題。
- ・町会や地区委員会には新しい人はなかなか入ってきにくい。地区委員も、学校関係、PTAの人が入ってきて少しメンバーが変わる程度。どうしても古くからの人ばかりになるので、地域の伝統を残し、維持していく、うまく結びつける方法を皆で考えていかなければいけないのではないか。

委員

- ・品川のブランド、と言われても、今一つピンとこない部分もあるが、逆に、それもよいと思う。居住地と商業地と工業地が、どこが盛んだとか3つに分かれているわけではなく、渾然一体化しているのが品川のまちの特徴ではないか。
- ・商店街も厳しくなって、この景気で工業も厳しいが、どこにいても生活ができる、買い物ができる、というのが品川の特徴になると思う。それがブランドかと言われれば、（私たち住民には）普通過ぎてよくわからないが、あえて言えば、そういうまちだという気がする。

委員

- ・私は区外に行くと、「品川のまちっていいよね」とよく言われる。どこがいいのか自分でも考えると、住んでいてよかったなとうれしく感じることはよくある。宿場祭り、池田山の史跡（五反田）など、きっと他の区にはない、素晴らしいものが品川区にあるんだなと感じている。
- ・スポーツでは、高齢者を中心に、荏原地区ではグラウンドゴルフがとても盛ん。このあたりではソフトバレーボールが盛ん。まちの人の固まりは違うような気がするが、それがいろいろな面で生きている。

- ・今、子どもたち（の活動）にお母さん方が、引率などでよく付いてきている。お母さん方は消費して、生産している。一生懸命（子どもに）付いていくあの姿を、これからの品川の中で普及していけば、まちの中でいろいろなコミュニケーションができると思う。

委員

- ・文化芸術には、お金がかかる、堅苦しいなど、敷居が高いイメージが強い。そういった文化芸術・スポーツに参加しようとしている人へのきっかけづくりが大切だと思う。そのきっかけの部分で、区が何をできるのかを考えていただきたい。

委員

- ・消費と生産の関係でいうと、きゅりあんで今までやってきたのはほとんど鑑賞型の事業。スポーツではテレビ観戦や競技場へ行って観戦する。文化芸術でも、たとえばサントリーホールで世界一流の音楽を聴く。きゅりあんで聴く。NHKの教育テレビで見る。以前から話が出ているように、鑑賞型というのは、一流のものに触れる、できる限り身近に（触れる）という意味で、機会はぜひ多く作るべきだと思う。それよりは、やはり今の品川区で、いろいろなかたちでの参加、区の行事になんとか動員して、実績をつくりたがる、無理やり引っ張ってきて機会を作っているようなところもあるかと思う。
- ・敷居が高い低い、の問題を考えると同時に、もっと参加しやすい、参加型というのは何なのか、どういうかたちがあるのか、ということは、皆さんのご意見をいただいて作っていただければと思う。

委員

- ・子どもたちには、将来スポーツ選手として生計を立てたいという子もいる。スポーツ協会では、平成25年度に東京国体が行われるので、国体出場を目指してジュニアの種目にもいくつか取り組んでいる。国体の代表選手として活躍できるような環境を今から整えてあげないといけない。すべての人にあまねくスポーツの場を提供する、一流選手を目指す子ども、消費の施策の間口はもっと広くあるべきだと思っている。
- ・昨年度から、WJBL（女子プロバスケットボールの2部リーグ）で「バスケットボールフェスタ」という公式試合を総合体育館で開いている。試合を見ることで触発される人もいる。一流の選手の人たちのプレーを間近で見て、また、そういう選手から指導を受けて、将来そういう場で活躍したいというきっかけも作ろう、と（スポーツ協会では）いろいろな取り組みをしている。
- ・生産するだけでなく、消費という観点も必要である。供給サイドと需要サイドのバランスを取っていかないと難しい。そうしたバランスを取れるようなスポーツのビジョンを、今回のビジョンの中にぜひ取り込んでいきたい。

委員長

- ・今日は、いろいろな観点から意見が出たが、今後、こうした意見を検討させていただき、次回の委員会までに、ビジョンの骨子のたたき台を提示し、次回委員会ではそれを議論し、大枠を決めていく形にさせていただきたい。

6 次回日程等について

事務局

- ・次回の委員会は、8月31日（月）午後2時からとする。

7 閉会

以 上